

島根県水産技術センター 漁況情報 令和2年8月31日発行

## トビウオ通信 (R2 第7号)

(本誌はホームページでもご覧いただけます。ホームページにはバックナンバーもあります。)  
<http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

### 《令和2年度マアジ新規加入量調査結果速報》

島根県水産技術センターでは、国立研究開発法人 水産研究・教育機構（水産資源研究所）、鳥取県水産試験場および山口県水産研究センターと共同でマアジ幼魚の新規加入量調査を実施しました。その結果をお知らせします。本調査はその年に生まれたマアジの加入状況を早期に把握するために、平成15年以降毎年実施しているもので、今年で18年目となります。

#### 結果の概要

- マアジ幼魚は、適水温帯(16～20℃)が広がる沿岸寄りの海域で多く採集されました。
- 調査結果を基に計算した今年のマアジ幼魚の加入量指数(来遊量の多さ)は、平成15年を1とすると1.35となり、昨年(0.70)と比べ高くなりました。
- 今年のマアジ0歳魚の漁獲量は昨年を上回ると推測されます。

#### マアジ幼魚の採集結果と分布状況

令和2年(2020年)5月18日から6月18日にかけて水産研究教育機構、隣県と共同で長崎県五島列島沖から鳥取県西部の海域における合計107地点で中層トロール網を用いてマアジ幼魚(令和2年(2020年)生まれ)を対象とした漁獲調査を実施しました。その結果、尾叉長2～4cmサイズを主体に合計40,098尾(1曳網当りの平均採集尾数:374尾)のマアジ幼魚が採集されました(図1)。

採集されたマアジ幼魚は、適水温と考えられる16～20℃(水深50m)の水温帯に多くが分布していました。分布範囲は例年同様、五島列島から隠岐諸島の

広範囲に及び、1 曳網当たりの採集尾数は鳥取県から山口県の沿岸寄りに多く、分布密度は全体的に高くなりました。

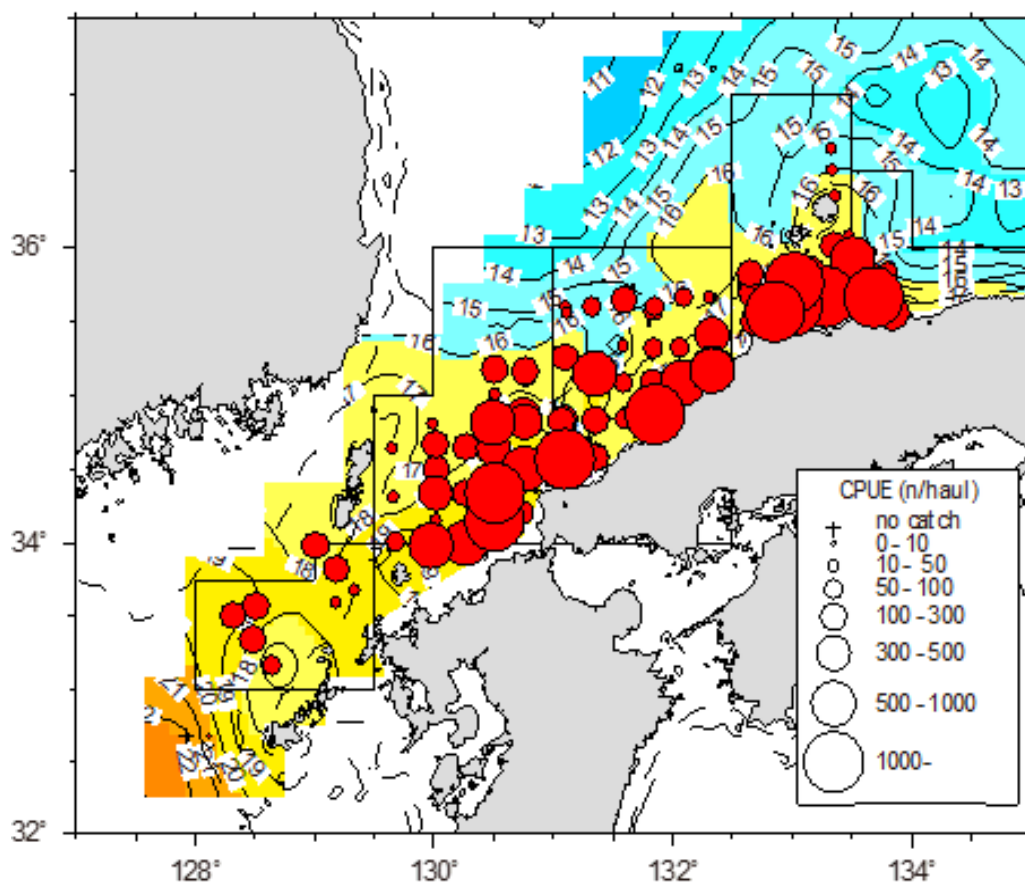


図1 マアジ新規加入量調査における2020年のマアジ幼魚の採集結果

円の大きさはマアジの採集尾数の多さを表し、+は採集されなかった点を表す。水深50mの水温分布については、青色が16°C以下、黄色が16~20°Cを表し、図中の数字は水温を示す。

(資料：国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所作成)

### マアジ幼魚の加入量と今後の漁況

マアジ幼魚の分布量と調査海域の水深50mの水温分布を基にして算定したマアジの加入量指数（来遊量の多さを表します）は、平成15年を1とすると、今年（令和元年）は1.35となり、昨年（平成30年）0.70と比べ高くなりました（図2）。今年の加入量指数は調査を開始した平成15年以降で見れば、過去17年間（平成15年～令和元年）の平均（1.10）よりも高い値となりました。この加入量指数は、その年の6月から12月の間に境港でまき網漁業によって水揚げされるマアジ0歳魚の

漁獲尾数とある程度の相関がみられることから、今後の山陰沖におけるマアジ0歳魚の漁獲量は昨年を上回ると推測されます。

マアジは小型の0歳魚を漁獲するよりも、1年後に成長してから漁獲を開始した方が単価は高く、資源を有効に活用できます。しかし、夏季には他の浮魚類（イワシ類やサバ類）の漁獲が減少するため、マアジ0歳魚が集中的に漁獲される傾向があります。単価の低い小型魚を多く獲り過ぎてしまうと、将来の単価の高い大型魚の漁獲量が減るだけでなく、産卵親魚の減少にもつながるため、過度な漁獲圧力がかからないよう適切な管理を行っていくことが大切です。

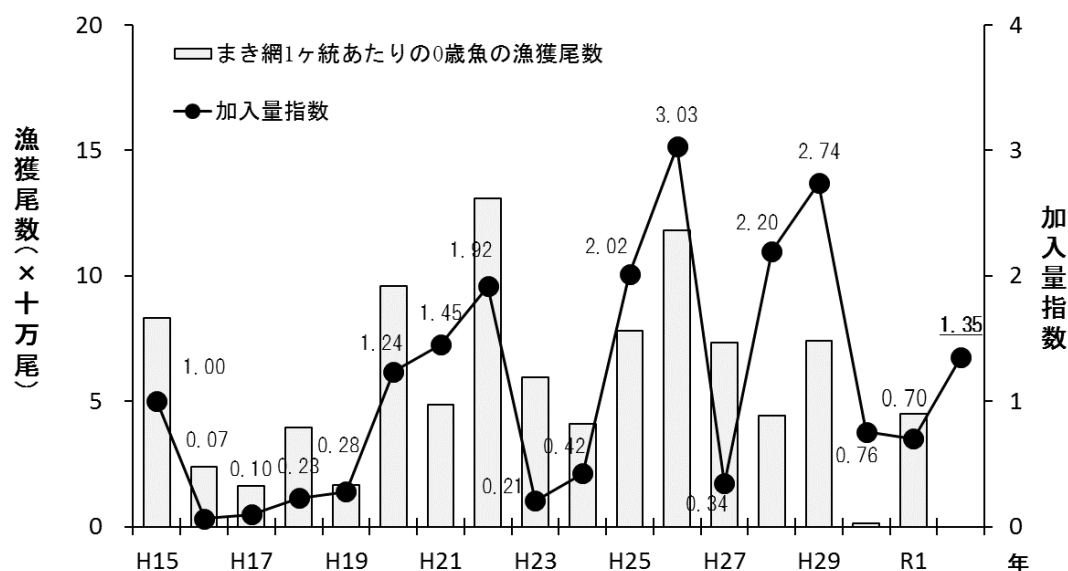


図2 マアジ幼魚の加入量指数と6～12月の境港におけるまき網1ヶ統あたりのマアジ0歳魚の漁獲尾数（鳥取県水産試験場集計）の年動向